

## 審査の結果の要旨

氏名：竹内 正人

本研究は、医療費請求データである診断群分類包括評価（DPC）データベースを用いた小児疾患の疫学研究に関する事例を二報提示した。

1. 2009年に全世界的なH1N1インフルエンザA型（2009H1N1）の流行がみられた際に、国外からは乳児が入院のハイリスクグループと報告された。DPCデータを用いた国内の後方視的疫学研究を行い、2009H1N1流行時期にインフルエンザの診断で入院した乳児は計1,023名で、同時期の1歳小児の入院数の約2倍であったが、重症者は少なかったことを明らかにした。またリン酸オセルタミビルが乳児入院症例の転帰に与える影響を検討し、投与の有無は入院期間および重症化に関与しないことから、オセルタミビルの有用性に関するエビデンスが不十分であると結論した。
2. 腸重積症は小児における代表的な急性腹症あり、かつロタウイルス（RV）ワクチン接種後のまれな有害事象として知られている。しかし、腸重積の発症頻度は国や地域により頃なり、国内における頻度に関する大規模な報告は皆無であることを背景とし、DPCデータを用いた後方視的研究を行った。RVワクチン国内導入前の2007年-2008年（7-12月）の12ヶ月間に、計2,427名の18歳以下入院患者を同定し、患者特性・治療内容・予後などを記述した。また、RVワクチン接種対象となる1歳未満の腸重積症を年間180-190人/10万出生と推計した。

以上、本論文は医療費請求データが疫学研究に有用である可能性を示唆し、その特長と限界点についてもあわせて論じている。本研究は医療費請求データが国内における医学研究に二次利用可能であることを具体例をもって提示した点に新規性があり、学位の授与に値するものと考えられる。